

赤ずきんちゃん

ROTKAPPCHEN

グリム兄弟 Bruder Grimm

楠山正雄訳

-----  
【テキスト中に現れる記号について】

《 》：ルビ

（例）お菓<sup>かし</sup>子

一：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例）九一<sup>じゅういち</sup>町も

〔 〕：アクセント分解された欧文をかこむ

（例）〔ROTKA:PPCHEN〕

アクセント分解についての詳細は下記URLを参照してください

[http://aozora.gr.jp/accent\\_separation.html](http://aozora.gr.jp/accent_separation.html)

-----  
むかし、むかし、あるところに、ちいちゃいかわいい女の子が  
りました。それはたれだって、ちよいとみただけで、かわくなる  
この子でしたが、でも、たれよりもかれよりも、この子のおばあさ  
んほど、この子をかわいがっているものはなく、この子を見ると、  
なにかもやりたくてやりたくて、いったいなにをやっているのか

わからなくなるくらいでした。それで、あるとき、おばあさんは、赤いびろうどで、この子にずきんをこしらえてやりました。すると、それがまたこの子によく似あうので、もうほかのものは、なんにもかぶらないと、きめてしまいました。そこで、この子は、赤ずきんちゃん、赤ずきんちゃん、とばかり、よばれるようになりました。

ある日、おかあさんは、この子をよんでいいました。

「さあ、ちよいといらっしゃい、赤ずきんちゃん、ここにお菓子<sup>かし</sup>がひとつと、ぶどう酒<sup>しゅ</sup>がひとつあります。これを赤ずきんちゃん、おばあさんのところへもっていらっしゃい。おばあさんは、ご病気でよわっていらっしゃるが、これをあげると、きっと元気になるでしょう。それでは、あつくならないうちにおでかけなさい。それから、そとへでたら気をつけて、おぎょうぎよくしてね、やたらに、しらない横道へかけだしていたりなんかしないのですよ。そんなことをして、ころびでもしたら、せつかくのびんはこわれるし、おばあさんにあげるものがなくなるからね。それから、おばあさんのおへやにはいったら、まず、おはようございます、をいうのをわすれずにね。はいると、いきなり、おへやの中をきよるきよるみまわしたりなんかしないでね。」

「そんなこと、あたし、ちゃんとよくしてみせてよ。」と、赤ずきんちゃんは、おかあさんにそういつて、指きりしました。

ところで、おばあさんのおうちは、村から半道はなれた森の中にありました。赤ずきんちゃんが森にはいりかけますと、おおかみがひよっこりできてきました。でも、赤ずきんちゃんは、おおかみって、どんなわるいけだものだからしりませんでしたから、べつだん、こわいともおもいませんでした。

「赤ずきんちゃん、こんちは。」と、おおかみはいいました。

「ありがとう、おおかみちゃん。」

「たいそうはやくから、どちらへ。」

「おばあちゃんのところへいくのよ。」

「前かけの下にもってるものは、なあに。」

「お菓子に、ぶどう酒。おばあさん、ご病気でよわっているでしょう。それでおみまいにもってってあげようとおもって、きのう、おうちで焼いたの。これでおばあさん、しっかりなさるわ。」

「おばあさんのおうちはどこさ、赤ずきんちゃん。」

「これからまた、八、九一町ちやうもあるいてね、森のおくのおくで、大きなかしの木が、三ぼん立っている下のおうちよ。おうちのまわりいけがきに、くるみの生垣があるから、すぐわかるわ。」

赤ずきんちゃんは、こうおしえました。

おおかみは、心の中でかんがえていました。

「わかい、やわらかそうな小むすめ、こいつはあぶらがのって、おいしそうだ。ばあさまよりは、ずっとあじがよかるう。ついでにりょうほういっしょに、ぱっくりやるくふうがかんじんだ。」

そこで、おおかみは、しばらくのあいだ、赤ずきんちゃんとならんであるきながら、道みちこう話しました。

「赤ずきんちゃん、まあ、そこらじゅうきれいに咲いている花をこらん。なんだって、ほうぼうながめてみないんだらうな。ほら、小鳥が、あんなにいい声で歌をうたっているのに、赤ずきんちゃん、なんだかまるできていないようだなあ。学校へいくときのように、むやみと、せつせこ、せつせこと、あるいているんだなあ。そとは、森の中がこんなにあかるくてたのしいのに。」

そういわれて、赤ずきんちゃんは、あおむいてみました。すると、お日さまの光が、木と木の茂った中からもれて、これが、ここでも、ここでも、たのしそうにダンスしていて、どの木にもどの木にも、きれいな花がいっぱい咲いているのが、目にはいりました。そこで、

「あたし、おばあさまに、げんきでいきおいのいいお花をさがして、花たばをこしらえて、もってつてあげようや。するとおばあさん、きつとおよろこびになるわ。まだ朝はやいから、だいじょうぶ、時間までに行かれるでしょう。」

と、こうおもって、ついと横道から、その中へかけだしてはいつて、森の中のいろいろの花をさがしました。そうして、ひとつ花をつむと、その先に、もつときれいながあるんじゃないか、という気がして、そのほうへかけて行きました。そうして、だんだん森のおくへおくへと、さそわれて行きました。

ところが、このあいだに、すきをねらって、おおかみは、すたこらすたこら、おばあさんのおうちへかけていきました。そして、とんとん、戸をたたきました。

「おや、どなた。」

「赤ずきんちゃんよ。お菓子とぶどう酒を、おみまいにもって来たのよ。あけてちょうだい。」

「とっ手をおしておくね。おばあさんはご病気でよわっていて、おきられないのだよ。」

おおかみは、とっ手をおしました。戸は、ぼんとあきました。おおかみはすぐとはいっていつて、なんにもいわずに、いきなりおばあさんのねているところへ行つて、あんぐりひと口に、おばあさん

をのみこみました。それから、おばあさんの着物を着て、おばあさんのずきんをかぶって、おばあさんのお床とこにごろりと寝て、カーテンを引いておきました。

赤ずきんちゃんは、でも、お花をあつめるのにむちゅうで、森じゆうかけまわっていました。そうして、もうあつめるだけあつめて、このうえ持ちきれないほどになったとき、おばあさんのことをおもいだして、またいつもの道にもどりました。おばあさんのうちへ来てみると、戸があいたままになっているので、へんだとおもいながら、中へはいりました。すると、なにかが、いつもとかわってみえたので、

「へんだわ、どうしたのでしょうか。きょうはなんだか胸がわくわくして、きみのわるいこと。おばあさんのところへくれば、いつだったのしいのに。」と、おもいながら、大きな声で、

「おはようございます。」  
と、よんでみました。でも、おへんじはありませんでした。

そこで、お床とこのところへいって、カーテンをあけてみました。すると、そこにおばあさんは、横になっていましたが、ずきんをすっぽり目までさげて、なんだかいつもとようすがかわっていました。

「あら、おばあさん、なんて大きなお耳。」

「おまえの声が、よくきこえるようにさ。」

「あら、おばあさん、なんて大きなおめめ。」

「おまえのいるのが、よくみえるようにさ。」

「あら、おばあさん、なんて大きなおてて。」

「おまえが、よくつかめるようにさ。」

「でも、おばあさん、まあ、なんてきみのわるい大きなお口なこと。」

「おまえをたべるにいいようにさ。」

こういうがはやいか、おおかみは、いきなり寢床からとびだして、かわいそうに、赤ずきんちゃんを、ただひと口に、あんぐりやってしまいました。

これで、したたかおなかをふくらませると、おおかみはまた寢床にもぐって、ながながと寝そべって休みました。やがて、ものすごい音を立てて、いびきをかきだしました。

ちようどそのとき、かりうどがおもてを通りかかって、はてなと思つて立ちどまりました。

「ばあさんが、すごいいびきで寝ているが、へんだな。どれ、なにかかわったことがあるんじゃないか、みてやらさばなるまい。」

そこで、中へはいつてみて、寢床のところへ行つてみますと、おおかみが横になっていました。

「ちきしょう、このばちあたりめが、とうとうみつけたぞ。ながいあいだ、きさまをさがしていたんだ。」

そこで、かりうどは、すぐと鉄砲をむけました。とたんに、ふと、ことによると、おおかみのやつ、おばあさんをそのままのんでいるのかもしれないし、まだなかで、たすかっているのかもしれないぞ、とおもいつきました。そこで鉄砲をうつことはやめにして、そのかわり、はさみをだして、ねむっているおおかみのおなかを、じよきじよき切りはじめました。

ふたはさみいれると、もう赤いずきんがちらと見えました。もう

ふたはさみいれると、女の子がとびだしてきて、

「まあ、あたし、どんなにびっくりしたでしょう。おおかみのおなかの中の、それはくらいっいたらなかったわ。」と、いいました。

やがて、おばあさんも、まだ生きていて、はいだしてきました。

もう、よわって虫の息になっていました。赤ずきんちゃんは、でも、さっそく、大きなごろた石を、えんやらえんやらはこんできて、おおかみのおなかのなかにいっばい、つめました。やがて目がさめて、おおかみがとびだそうとしますと、石のおもみでへたばりました。

さあ、三人は大よろこびです。かりうどは、おおかみの毛皮をはいで、うちへもってかえりました。おばあさんは、赤ずきんちゃんのもってきたお菓子をたべて、ぶどう酒をのみました。それで、すっかりげんきをと리카えしました。でも、赤ずきんちゃんは、(もうもう、二どと、森の中で横道にはいって、かけまわったりなんかやめましょう。おかあさんがいけないと、おっしゃったのですものね。)と、かんがえました。

底本：「世界おとぎ文庫（グリム篇）森の小人」小峰書店

1949（昭和24）年2月20日初版発行

1949（昭和24）年12月30日<sup>4</sup>版発行

原題の「〔ROTKA:PPCHEN〕」は、ファイル冒頭ではアクセント符号を略し、「ROTKAPPCHEN」としました。

「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

入力：大久保ゆう

校正：浅原庸子

2004年4月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。